

まちづくり

Vol. 241

(H28. 3. 25)

北海道開発局都市住宅課
まちづくり相談窓口

メールニュース

今号の
記事

0101010101

札幌真駒内地区で子供達が地域独自のベロタクシーをデザイン

寄稿 再発見：わが街の文化遺産「札幌軟石」

平成27年度「手づくり郷土賞」が選定されました

これからのまちづくりを考える 立地適正化計画制度の活用と都市防災のあり方
まちづくりに関して紹介したい地域の取組、配信アドレスの変更等については、
まちづくり相談窓口(メールはこちら)まで

※配信希望は随時受け付けております。

各項目の○をクリックすると
各項目見出しに
ジャンプします

札幌真駒内地区で子供達が地域独自のベロタクシーをデザイン

札幌中心部で自転車タクシー「ベロタクシー」を運行する「NPO法人エコ・モビリティ サッポロ」は、南区真駒内地区で地域共同の運行を目指して、ベロタクシーのラッピングデザインを考える「ベロタクシーデザインしま専科^{せんか}」を今年1月から2月にかけて、全4回開催。札幌市立大学と子供の体験活動の場「Coミドリ」(運営：NPO法人さっぽろAMスポーツクラブ)の協力のもと、子供達がデザインの専門家から基礎を学び、地域の運行に相応しいベロタクシーのデザインを描きました。



ラッピングされたベロタクシーは、閉校となった旧真駒内緑小学校を連携・交流の場として活用している「まこまる」の1周年記念イベントの開催に合わせ、2月27日に初めてお披露目されました。

完成したベロタクシーは、当面、真駒内の商店街や町内会によるイベント時の店舗間などの移動手段として運行する予定ですが、「ベロタクシーデザインしま専科^{せんか}」では、完成したベロタクシーを使ってどのような活動ができるかについてもアイディアを出し合い、子供達の自由な発想で思い描いた未来の活用もデザインしました。

「ベロ」(VELO)とは、ドイツ語で「自転車」の意味。広告パートナー・ドライバー・地域住民等の協力により、世界各都市で広がり続けているベロタクシーは、公共交通を補完する乗り物としてだけでなく、環境問題、高齢化社会問題、地域活性化、雇用問題などの社会的な課題解決も目指し、近距離交通システムとしてドイツで開発されました。電動アシスト機能を搭載していますが、時速10km前後で移動するため、バスやタクシーでは気付くことができない街の景色や風を感じられる他、ボディにデザインされたラッピング広告を地域の住民が見て楽しむことも魅力の一つです。

札幌でも「NPO法人エコ・モビリティ サッポロ」が新しいモビリティサービスとして2008年から、まちなかを中心に事業を展開。現在、市内に8台のベロタクシーがあり、このうち1台を真駒内地区でデザインしました。

真駒内は、1972年に札幌冬季オリンピックの主会場となるなど、特徴的な歴史を有する地区。

戸建と集合住宅の用地、商業施設用地等が明確に区分され、公園等が計画的に整備されるなど、ゆとりと落ち着きのある緑豊かな住宅地ですが、南区の他地域と同様に、少子高齢化を伴う人口減少が進行しているなどの課題も生じています。

エコ・モビリティ サッポロでは、昨年、真駒内地区の商店街イベントに合わせて、真駒内団地商店街振興会や関係機関と共同でベロタクシーの試験運行を実施。都心部以外で、地域連携型のサービスを実施したいエコ・モビリティ サッポロ側の考えと、互いに離れた商店街同士でもお客さんが移動に不便を感じないようなサービスを行いたい真駒内地区の商店街側のニーズが合致。真駒内地区でベロタクシーの本格運行を目指しながら、地域活性化の一翼を担います。

真駒内地区でイメージされる「緑」「桜」の色が使われたベロタクシーは、子供達がワークショップ形式により、市民・ドライバー・運営者、それぞれの立場と視点でデザインを考え、さらにまちで見るエドウィン・ダン記念館やキツネ、などのコンテンツも取り込んだ合作のもの。国産航空機カラーデザインなども手掛けている札幌市立大学デザイン学部石崎教授の監修のもと、地域への愛着も感じられる洗練されたデザインとなりました。



また、将来の活用について子供達が描く「未来のデザイン」では、アイスクリームや駄菓子の移動販売、音楽を流しながらの走行など、楽しめる活用方法の他、スマホで位置情報が分かり、簡単に呼ぶことができるアプリの導入や、高齢者や小さな子供連れ家族などの買い物の足とするなど、利便性の向上や社会的な課題解決に向けた活用方法についても提案されました。

ベロタクシーの今後の展開について、エコ・モビリティ サッポロの栗田代表は、「ベロタクシーを地域のコミュニケーションツールとしたい。そのためには、運転する方、乗る方、これを見る市民の方、全員地元で行うのがベスト」と述べ、その意義について、「運転する方は、地域ならではの会話や、人の繋がりで気軽に乗せることができるため、多世代間の交流に繋がる」とし、「乗る方の活用方法についても、お出かけサポートや高齢者見守りサービスの機能などが考えられます。そして、開かれた空間の中でゆっくりと走るベロタクシーであるからこそ、乗っている方・運転している方の笑顔と、地域独自のベロタクシーが走る風景を、まちに住む方が見て楽しむことができる。」「そのようなベロタクシーを通じて、まちのコミュニケーションの橋渡しをしていきたい。」と抱負を語りました。

※ベロタクシー札幌の情報については、[NPO法人エコ・モビリティ サッポロ HP](#) をご覧ください。
 ※「まこまる（旧真駒内緑小学校跡利用施設）」の情報については、[札幌市 HP](#) をご覧ください。

= 寄稿 = 札幌建築鑑賞会

再発見：わが街の文化遺産「札幌軟石」

1 札幌軟石とは？

今から約 4 万年前、現在の支笏湖一帯で大カルデラ噴火が起きました。火山噴出物が火砕流となり、胆振から石狩南部にかけての広範な範囲に堆積しました。この噴出物が固まってできたのが札幌軟石です。地質学的には、「支笏溶結凝灰岩」といいます（注 1）。

札幌軟石は明治の初期、現在の南区石山から真駒内柏丘の付近で見つかりました。加工しやすく、耐火・断熱に優れているため、建築の資材として重用されました。特に積雪寒冷の風土に適した建材だったといえます。

2 街へ運ばれた札幌軟石

石山で切り出された軟石は当初、馬で札幌の街へ運ばれました。豊平川の「上山鼻渡瀬」（現在の藻岩橋付近）から北へ、「直線馬車道」と呼ばれる道が敷かれ、1876（明治 9）年に開かれた山鼻屯田兵村を通り、現在の南 2 条西 11 丁目あたりまで至ります。この道が、軟石を運ぶ「石山通り」と呼ばれるようになりました。現在の国道 230 号です（写真 1）。

その後 1909（明治 42）年、道に沿って馬車鉄道が設けられ、より大量の軟石が札幌の街にもたらされるようになりました。馬車鉄道は軌道を延伸し、後の路面電車へと発展します。札幌軟石の運搬は札幌の都市機能の形成と大きな関わりを持っていました。



写真 1：軟石運搬に由来する石山通

3 札幌軟石発掘大作戦

札幌市内に札幌軟石の建物が明治以降どれだけ建てられ、どれだけ残っているのでしょうか。どれだけ建てられたかは、文献史料に頼るほかはありませんが、札幌市の現市域を対象とした軟石建物の建築数を明らかにした統計は今のところ見つかりません。

一方、どれだけ残っているかは、市内を実際に見て歩くことによって確かめることができます。市民グループ「札幌建築鑑賞会」（注 2）は「札幌軟石文化を語る会」（注 3）と協力し、2005 年から市内に現存する軟石建物を調査してきました。「札幌軟石発掘大作戦」と銘打った調査活動によって、さまざまなことが見えてきました。

調査の結果、市内で 355 棟の軟石建物を確認しました。札幌市全域の建物数を明らかにしたのは初めてのことと思います。一方、調査を始めた 2005 年から 2016 年の間に、そのうちの 40 棟が解体されました。解体は特に市中心部で多くみられます。

建物の分布から、地域の歴史を読み解くことができました。市内 10 区を五つの地区（中心部、北東部、南東部、南部、西部）に分けて、傾向を見てみましょう。

① 中心部（中央区）

74 棟の建物を確認しました（うち 21 棟が調査後に解体）。明治～昭和戦前期に建てられた商家や質屋の蔵だったものが多くみられます（写真 2）。大通以南からススキノ周辺にかけて分布しているほか、創成川東地区に物流系の倉庫が残っています。

② 東部（北区、東区）

83 棟（うち 2 棟が解体）を見つけました。農業系の倉庫やサイロが多いのが特徴です。東区ではタマネギ農家の倉庫で昭和 30 年代に建てられたものが多く、喫茶店やレストランなどに再利用され



写真 2：明治創業、今も現役の薬局の蔵（中央区南 1 西 1）

ています。軟石の蔵や倉庫が飲食店などに再利用される例は他の地区でもみられますが、この地区で特筆すべきは、再利用が多岐にわたっていることです（写真3）。写真スタジオや児童遊戯施設、葬儀場、団地の集会所など、バラエティに富んでいます。

③ 東部（白石区、厚別区、豊平区、清田区）

61棟（うち解体8棟）で、やはり農業系の倉庫やサイロが多いのですが、この地区ではリンゴの貯蔵庫だったものが目立ちます（写真4）。

④南部（南区）

南区だけで128棟と、群を抜く多さです（うち解体9棟）。数が多いのは札幌軟石の主要な産地が南区石山であったことから頷けますが、とりわけ際立っているのは、個人の住宅が多いことです。特に石山地区における軟石住宅の密度の高さは、全国的に見ても稀有ではないかと思えます。

⑤西部（西区、手稲区）

数は9棟と、他の地区に比べて少ないのですが、少ないことが特徴ともいえます。郊外にサイロが残っているほか、小学校の旧奉安殿（琴似神社）など、珍しい建物があります。

以上のように、札幌軟石の建物を手がかりとして、その土地のなりわいや人々の営みを知ることができました。今回特に判ったことは、北東部から南東部、南部にかけて残る農業系の倉庫や個人住宅の多くが昭和戦後期に建てられていることです。「札幌軟石は明治から昭和戦前まで盛んに用いられたが、戦後は利用が激減した」という見方がこれまでありました（注4）。

しかし、調査結果はこれが謬論であったことを物語っています。少なくとも昭和30年代までは、かなり多くの建物が軟石を用いて建てられたのです。

4 札幌軟石の魅力

私たちのグループが札幌軟石に惹きつけられたのはなぜでしょうか。一つは、札幌軟石が「札幌ならでは」の素材であることです。軟石と呼ばれる石材は道内の他の地域でも産出されてきましたが、色合いや肌合いが微妙に異なります。札幌の街並みを形作ってきた独自の建材として、個性が感じられます。

特に、昭和30年代前半までの軟石は手作業（ツルハシ）で切り出されたため、石材の一つ一つに、機械で画一生産された工業製品には見られない趣があります。歴史を文字どおり刻んだ顔ともいえます。また、花崗岩や安山岩（いわゆる硬石）などに比べて柔らかかみを感じられることも、親近感を呼ぶのかもしれませんが。

5 新たな利用と取り組み

札幌軟石は、昭和50年代に南区石山での採掘を終えました。石山緑地は、かつての採石の跡を活かして蘇ったものです。現在採石されているのは同区常盤で、常時生産している企業は一社のみです。

しかし、軟石は近年再び注目されるようになりました。新しい建物の外壁や内装材にも用いられるようになったのです。



写真3：元タマネギ倉庫を再利用する喫茶店
（東区東苗穂5-2）



写真4：元リンゴ選果場を再利用する喫茶店
（豊平区平岸2-6）

また、建物にとどまらず、公園などの一部に使われたりもしています。古い石材の風合いを生かして、ガーデニングの一部に用いる例もみられます（写真5）。

南区石山にある「工房軟石や」では、札幌軟石の端材に付加価値を加え、インテリア商品として開発しています（注5、写真6、7）。



写真5: 古材を再利用した石畳 (中央区伏見3)



写真6: 元個人住宅を再利用する「工房軟石や」
(南区石山1-2)



写真7: 「軟石や」の商品

札幌建築鑑賞会では、軟石が脚光を浴びる一助になればと願い、発掘大作戦の成果を市民に向けて発表し、その魅力を伝えてきました（写真8）。

市民の関心の高まりと相まって、行政サイドでも軟石の建物を「札幌市都市景観条例」に基づく「札幌景観資産」に指定するなどして、保存活用に力を入れています。「札幌市景観計画」においても、「石造・レンガ造の倉庫、農業施設など地域の歴史を物語る建物を生かして、地域らしさが感じられる景観の形成に努めます」という考え方が示されています。

今後も、当会の成果が行政の施策に役立てられるよう協力したいと考えています。

建築用石材は全国各地で採掘されてきましたが、現在も採掘しているところは必ずしも多くありません。その意味で、札幌軟石が今も採掘されているのは札幌にとって貴重な営みといえます。私たちはこの営みを応援していきたいと思えます。



写真8: 「札幌軟石発掘大作戦」の成果発表 (2015年12月)

注1: 火砕流の高温により噴出物の粒子が溶けて固まってできた凝灰岩が、札幌軟石である。

注2: 「わが街の文化遺産の再発見」をテーマとして、1991年に発足。「大人の遠足・大人の社会見学」や「古き建物を描く会」などを続けている。入会金・年会費なし、1～2年に1回程度、寄付を募り運営している。会員には通信「きーすとーん」が郵送される。

問合せ・申込み先: keystonesapporo@yahoo.co.jp

注3: 2002年の藻南公園（札幌市南区）「札幌軟石ひろば」づくりのワークショップに参加した市民を中心に作られた市民グループ。軟石に関わる活動を展開している。その活動が基になって、「札幌軟石まつり」が催されるようになった。

注4: インターネット上のサイト「ウィキペディア」で「札幌軟石」や「札幌市資料館」を検索すると、この種の記述がみられる（2016.3.15現在）。

注5: 「軟石や」サイト <http://212a-a.jimdo.com/> 参照

寄稿者: 札幌建築鑑賞会 代表 杉浦正人

平成27年度「^{ふるさと}手づくり郷土賞」が選定されました —道内から大賞部門1案件、一般部門2案件—

国土交通省は、全国各地の地域づくり活動の中から優れた取組を表彰する平成27年度「手づくり^{ふるさと}郷土賞」を選定しました。

今年度は、全国各地から応募があった50件の内、22件（大賞部門：7件、一般部門：15件）の優れた取組を選定。道内からは「滝川スカイスports振興協会」が大賞部門の国土交通大臣表彰を受賞した他、一般部門の国土交通大臣表彰が2件、奨励賞として選定委員会表彰が1件、合計4件が選ばれました。道内での大賞部門の受賞は8年ぶりです。

「手づくり^{ふるさと}郷土賞」とは、地域の魅力や個性を創出しているインフラ及びそれと関わりを持つ優れた地域活動を発掘し、各地で個性的で魅力ある地域づくりを目指すもので、昭和61年度に創設され、本年度で30回目の開催となる国土交通大臣表彰です。

表彰する部門は、『一般部門』と『大賞部門』の2部門。『一般部門』は、地域の魅力や個性を創出している、社会資本及びそれと関わりがある優れた地域活動が一体となった成果を対象とし、『大賞部門』は、これまで「手づくり郷土賞」を受賞した団体のうち、一層の活動の充実が行われているものを対象としています。



また、『一般部門』では、手づくり^{ふるさと}郷土賞創設30周年を記念して、東京工業大学にて公開審査会を開催。第1回選定委員会にて選出された応募者29団体が一堂に会し、各活動を紹介しながら選定委員と一緒にインフラを通じた「手づくり」と「郷土」について討論しました。

◆手づくり郷土賞（大賞部門）：国土交通大臣表彰

応募案件名：“空の波打ち際”の創造～大空に一番近いまちづくり～

応募者：公益社団法人 滝川スカイスports振興協会（滝川市）

■活動概要：「たきかわスカイパーク」は、青少年に大空の夢を与えるという社会教育的見地から石狩川の広大な河川敷を利用して整備された日本でただ一つの本格的な航空公園です。

全国有数の飛行実績と全国一の飛行体験者数を誇り、総合的な学習への活用の他、観光活用、航空防災や航空教育、更には体験飛行をふるさと納税返礼品にも活用されています。20年以上に及ぶ飛行活動・スカイスportsイベントや市内外の小学校のグライダー体験授業の導入・市民体験飛行会等により、地域住民には「滝川＝グライダーのまち」としての認識と誇りが醸成されています。

また、近年では観光面での広域連携の動きも強まり北海道の澄み渡った空を売りとした全道規模の「空の観光」への発展もさらに期待されています。

■評価ポイント：洪水対策から生まれた航空公園を活用し、更にグライダーの街という価値を広め、進化させている。



体験飛行
福祉、教育等に活用



グライダー
啓発普及活動



愛好者対象
フライト事業

◆手づくり郷土賞（一般部門）：国土交通大臣表彰

応募案件名：皆でつくろう！手作り魚道 -魚がのぼり、笑顔ひろがる-

応募者：駒生川に魚道をつくる会（網走郡美幌町）



発表者：町田氏

■活動概要：「魚が泳ぐ川」を取り戻したいという思いから手作りの魚道づくりが始まりました。

魚道の設置は会員の他、地域住民や大学生、役場職員等多くの参加者にて実施しています。また、魚道の材料は畑からでた不要な石を活用するなど地材

材地消で実施しています。その結果、40年ぶりにサケが遡上し、稚魚との対面に涙する会員もいました。子供達の体験学習や域外からの視察の受け入れ、フォーラム開催等をおし河川環境の大切さを伝える啓蒙も実施しています。私たちは、原生自然に復元するのではなく、共生する自然を目指しています。

評価ポイント：市民主導による取り組みにより、公共事業と魚の共生を目指し成果を上げている。



魚道の完成を喜ぶメンバー



遡上したサクラマス

◆手づくり郷土賞（一般部門）：国土交通大臣表彰

応募案件名：流氷を活かすオホーツク流儀のおもてなし活動

応募者：しれとこ・ウトロフォーラム21（斜里郡斜里町）



発表者：桜井氏

■活動概要：世界自然遺産地域の登録や東オホーツクシーニックバイウエイルートの選定を機にウトロ地区のまちづくりグループとして活動開始しました。

観光客分散を促し交通混雑の緩和を図る取り組みや冬季の景観を確保するための除雪ボランティアを実施しており、流氷を見ることができる世界最南端の地域の価値を創出しています。作業を共にすることにより地域のつながりが強くなり、地域のものを（大切に・維持し・価値を高めよう）という考え方が浸透しています。

評価ポイント：住民主導によるわかりやすい活動。厳しい自然環境を魅力あるものになっている。



住民が雪壁を除雪



右側：除雪前の景観、除雪後

◆手づくり郷土賞(奨励賞)：手づくり郷土賞選定委員会表彰

応募案件名：埋もれていた町の鉄道がよみがえる

応募者：一般社団法人 寿都観光物産協会（寿都郡寿都町）



発表者：寺門氏(左)・渡部氏(右)

■活動概要：1人の探究心と地域住民の熱意が結びついて廃線と共に忘れられた資源を発掘・活用しています。

寿都鉄道に関わる歴史学習会、ツアー参加者と地元住民による交流会等を開催しています。当初は鉄道廃線遺構への関心が高かったですが、現在は歴史探訪の関心が増しています。

評価ポイント：観光資源を発掘しこれからも拡大していきそう。さらなる活用に期待したい。



地元住民によるガイド



ツアー企画・ガイド育成講座

>>もっと詳しく

○これまでの受賞リスト ([国土交通省HP](#))

これからのまちづくりを考える

立地適正化計画制度の活用と都市防災のあり方

特別講演・^{ていだん}鼎談の開催(日本都市計画学会北海道支部主催)

公益法人 日本都市計画学会北海道支部（支部長：北海道大学大学院田村亨教授）では、今年4月2日、平成28年度定時総会の開催に際して、「立地適正化と都市防災」と題した特別講演と、都市計画やまちづくりの専門家による^{ていだん}鼎談を札幌市内で開催します。

^{ていだん}鼎談とは3名による座談会形式で行うもので、北海道釧路市などの地震・津波災害の事例紹介の他、コンパクトシティを進める立地適正化計画制度の活用と合わせた災害に強いまちづくりなどについて、議論することを予定しています。

参加は無料で、会員以外でも申込み可能。参加希望の方は、所属・役職・氏名・連絡先（住所・電話番号・Email）・懇親会参加（有料）の有無を記載の上、下記連絡先（北海道支部総務担当幹事）へ事前にお申し込みください。

■日時：平成28年4月2日（土曜日）14：45～17：15

■会場：ホテルライフオート札幌 4階 アニマート

■内容：特別講演と^{ていだん}鼎談

第一部：特別講演 14：45～15：45

演題 「立地適正化と都市防災」

講演者 中井 検裕氏 公益社団法人日本都市計画学会会長／東京工業大学教授

第二部：^{ていだん}鼎談 16：00～17：15

登壇者 中井 検裕氏 公益社団法人日本都市計画学会会長／東京工業大学教授

岡本 満幸氏 釧路市総合政策部次長

小松 正明氏 公益社団法人日本都市計画学会北海道支部副支部長
／国土交通省北海道開発局稚内開発建設部部長

懇親会 17：30～19：30

会場 ホテルライフオート札幌 4階 グラーベ

会費 5,000円（準備の都合から事前申し込みが必要）

■連絡先

日本都市計画学会北海道支部

北海道支部総務担当幹事 伊藤徳彦

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目2番17号 セントラル札幌北ビル

一般社団法人北海道開発技術センター

Tel：011-738-3363

Fax：011-738-1889

E-mail：t-ito@dechnet.or.jp